



谷中蛭沼・11区  
区長 佐藤俊彦さん

今回、地区独自の防災訓練を実施するにあたり佐藤区長は、「東日本大震災発生当時、私は代理区長の立場もありましたが、本能的に地区内の巡回をして被害状況の把握に努めました。私たちの地区でも被害が多かったのは、主に屋根瓦で93戸の被害が出ました。けが人も2人。落ちてきた瓦、倒れてきたテレビに当たったというものでした。この巡回の最中、役員全員が単独で行動していたことが、後に判明。これにより、自主防災会として緊急災害時の被害状況、安否確認などの巡回地域、連絡体制の見直しを図る必要性が

「災害時の対応の不備に気づく」

**大震災の教訓から  
地区の自主防災を考えた**  
谷中蛭沼地区では、町の防災会としては初めてとなる自主防災訓練を実施。この独自ともいえる防災訓練が地区にもたらしたものは、

当日の参加人数	
本部役員	8人
班長	25人
地区協力者	6人
訓練参加者	140人
邑案消防署員	6人

あると痛感しました」と大震災発生時の状況を説明してくれました。

その後、地区では役員間で話し合いが何度か持たれ、災害発生時の初期対応規約の作成などにも着手。自分たちで何ができるかを、真剣に考えたと佐藤区長は当時を振り返ります。それは谷中蛭沼地区で、自主防災訓練実施が決まった瞬間でした。

想像以上の参加人数に改めて  
自主防災の必要性を感じた

9月11日午前9時、屋外広報から佐藤区長のアナウンスが流れた。谷中蛭沼地区の自主防災訓練の開始を告げる、それが合図でした。

参加人数は、地区住民延べ179人を数え、住民の避難訓練も実施。消防署員による講話や実技指導を通して、防災の心構えや災害発生時の対応、救急救命法、初期消火訓練など多岐にわたって学びました。

佐藤区長は、「訓練参加者は想像以上の人数。特に次世代の担い手となる



宮城県女川町



岩手県大槌町

特集  
3.11

# 大震災からの 教訓

東日本大震災から、もう半年が過ぎました。この間、未曾有の大震災の教訓から、自主防災に取り組み地域があり、一方で復興支援の願いを込めた若者たちの取り組みがありました。それは、「自分たちには何ができるか」ということから出発しています。今回は、それぞれの考える「大震災からの教訓」を特集します。



自主防災訓練の開始を告げる  
佐藤区長のアナウンスが響く



たくさんの参加者が谷中蛭沼公民館に集まり、真剣な眼差しで消防署員の話しに耳を傾けていました

子どもたちも多く参加して、家族の関心が高かったことの表れと感じました。隣近所の人たちや知人同士に参加も目につき、とかく近所づきあいが希薄といわれている社会で、「共助」という互いに助け合う精神があったものと確信しました。今後については、今回の訓練で体験した思いや絆を生かし、機会を通じての『自助・共助』の大切さを伝え、地域の皆さんと一緒に学習していきたいと考えています」と今回の自主防災訓練についての感慨を述べてくれました。

## 自主防災訓練からの教訓



もう二度とあんな地震は経験したくない  
大野ハルさん

interview

生まれて初めて、あんな大きな地震を経験しました。大きな揺れに外にはって出たのを覚えています。仏壇も倒れそうになり、とても怖かった。もう、二度と経験したくないですね



ほかのお母さんたちにも教えた  
たいです  
町田順子さん

interview

防災訓練で、家具の転倒防止につっぱり棒を使うこと、水も3日分より1週間分用意しないと足りないことなど、参考になりました。自宅でも簡単にできることから始めようと思います。ほかのお母さんたちにも教えたたいです



地域の実情に合った  
防災訓練が必要だと  
感じました  
佐藤八郎さん

interview

日ごろから地域の実情を把握しておく必要があると思います。この家はお年寄りのひとり暮らしだということ。そして、その地域の実情に合わせた訓練を実施することが、地域防災の本来の意味だと思います





町の防災地図に真剣な眼差しを向ける星野さん親子

大震災の教訓から  
**復興支援とまちの防災を考えた**  
毎年反戦や平和への思いを発信してきた邑楽町平和展。今年は未曾有の大震災を受け、「復興支援とまちの防災」というテーマで開催されました。

**大震災を経験し、「自分たちには何ができるか」を考えました**

邑楽町職員労働組合青年婦人部がつくる「邑楽町平和実行委員会」は反戦や平和への思いを発信していくため、毎年邑楽町平和展（以下、平和展）を開催してきましたが、東日本大震災を受け、今回「復興支援とまちの防災」をテーマに企画、9月10日に開催されました。

実行委員長の中村さんは、「役場からもボランティアとして若手職員が、被災地へと行きました。支援活動の報告会を開き、テレビや新聞では決して



町平和展実行委員会・委員長  
中村和典さん

伝わらない被災地の悲惨な状況を目的の当たりにして、復興支援のために、自分たちには何ができるのかを改めて考えました」と今回の開催にあたってのきっかけを語ってくれました。震災直後だったこともあり構想の段階で、さまざま議論が青年婦人部内で交わされ、まさにこの企画ができるのか、自粛した方がいいのではないかななどの意見も数多く出たそうです。

「不安もありましたが、何より被災されたかたたちを勇気づけたい、平和な日常生活を突然奪われてしまった被災地、周辺地域の一日も早い復旧、復興を願って開催したいという思いがありました。そして、町民の皆さんには、この未曾有の大惨事を契機に防災意識を高めてもらいたいという願いもありました」と中村さんは言う。

大震災の教訓から復興支援、そして「町民の皆さんのために」という若者たちの願いが、この平和展には込められているのです。

大震災の教訓から  
**親子で防災について共通の認識を持った**

平和展には数多くの人が訪れます。その中で、被災地福島県南相馬市に実家のある星野さんにお話を伺える機会に恵まれました。

**実家が東北にあるので、大震災は本当に人ごとではありません**

平和展には、家族連れなど数多くの町民の皆さんが訪れました。星野さん親子もその一組。母親の雅代さんは、「福島県南相馬市に実家があり、国道6号線よりも内陸だったため、津波の影響は受けませんでした。でも、原子力発電所から20〜30キロメートル圏



星野絵梨花さん、雅代さん親子  
(前原・4区)

内のため緊急時避難準備区域に入っています。大震災の直後、父と母が2週間ほど、私たちの家へ避難していただきました。ですから、今回の大震災については本当に人ごとではありません。心から被災地の復興を願ってやみません」と大震災についての思いを語ってくれました。

「大震災の時、学校の部室にいました。激しい揺れに驚いて、すぐに校庭に出ました。震災後、地震が起こる度に先生たちは、校内を点検、見回りするようにになりました」と娘の絵梨花さん。今回、親子で平和展へと足を向けたのも大震災がきっかけで、防災について親子で話す機会が増えただけだと話します。

最後に星野さんは、「家族全員で方が一大きな災害が起こった時の避難の仕方や、避難場所について話し合っておく必要があると思います。そして防災について共通の認識を持つように心がけていきたいです」と家族で防災を考える重要性を語ってくれました。



↑願いを込めた風船を飛ばす。遠く被災地へ思いが届きますように



↑立体的に作られた町の防災地図

災害派遣からの教訓

役場職員の清水さんは6月30日から7月8日まで、被災地宮城県女川町へと災害派遣されました。その被災地で体験を今振り返ります。



宮城県女川町へ災害派遣された  
清水和明さん

実際に被災地に立つてみると、「これが本当に現実なのか」と思えるくらい悲惨な現状でした。ひとつの町が津波に飲み込まれて、本当に何もなくなっていました。

現地では、自分は取捨物の引渡業務を担当。探しに来た町民の人の対応もこなしました。ヘドロのついた取捨物にはおいが強烈で、それをきいにする作業も慣れるまで苦労したのを覚えています。

←被災地宮城県女川町。津波に飲み込まれた町は、がれきの山と化していました

一緒に業務にあたっていた女川町役場の臨時職員のかたが、津波で母親を亡くされていた。「いつまでもよくよよしてられないよ」と話すその笑顔に「強い人だな」と思うと同時に、何だかやるせない気持ちになりました。被災地で災害支援活動を行っているとき、改めて思ったのは「いざという時、何ができるか」ということ。日ごろから防災意識を持ち、災害時に動ける態勢を、整えておくことの大切さを実感しました。決して忘れられない経験です。



子どもたちでも見てすぐ分かるように、粘土で建物などを作りました

町の防災地図を立体的に作り、避難場所や冠水しやすい場所、川がはらんしたときに予想される水位などを表示して、「自らの避難」を具体的に知ってもらうための展示を行いました



「がんばろう日本！」のロゴが胸元に

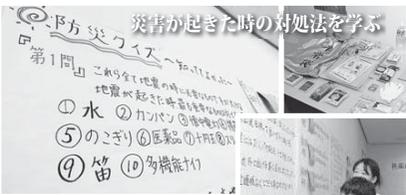
東北を応援していることが目に見える形で分かるように、そして義援金を集めるためにポロシャツを製作。売り上げの一部は義援金として被災地へ送られます



負けるな東北ストラップ



売り上げの全額が義援金へ  
福島県 会津若松市の民芸品「起き上がり小法師」  
手作り体験コーナー 会津若松市の民芸品、起き上がり小法師。「転んでも転んでも立ち上がる」というキャッチフレーズは復興を願うメッセージ。東北への思いを込めた「負けるな東北ストラップ」の手作りコーナーもありました



災害が起きた時の対処法を学ぶ  
防災クイズで、防災を知る  
実際に災害が起きたときの対処法や応急処置法などを指示。一部の内容をクイズ形式にして、子どもから大人まで興味を持ってるように展示しました



過去の経験を生かす  
復興したまちを見る  
過去に起きた阪神淡路大震災の復興のようすを取り上げ、展示しました。震災から復興を遂げたまちを見ることによって東北も必ず復興するという、強い気持ちになれます



岩手県の郷土料理「ひつつみ」  
非常食をアレンジ「揚げ乾パン」  
食を通して被災地に思いを馳せる被災地、岩手県の郷土料理である「ひつつみ」を無料配布。また、非常食を身近に感じてもらうおうと、非常食の定番「乾パン」を食べやすくアレンジした揚げ乾パンを無料配布しました

復興の願いはきっと届くはず  
この大空は被災地東北へと  
続いているのだから。